

アラビア語チュニス方言の未完了形における非現実性と時間

熊切 拓

東京大学大学院人文社会系研究科研究員

cyberbbn@gmail.com

要旨

アラビア語チュニス方言の動詞には、完了形・未完了形・命令形の3つの動詞活用系列が存在する。このうち未完了形は、習慣・属性・未来など時間的に不定な事態を表し、その点で非現実性と関連する。また、語りにおいては、完了形が前景の語りに用いられるのに対して、未完了形は通常は後景の語りに用いられる。しかし、物語では、前景の語りで、未完了形が現れる場合があり、本発表はこうした特殊な用例について報告を行った。この用法は通常の時間の流れとは異なる「異常な事態がありえないほどの短い時間に生じた」ことを表すと考えられ、それゆえ非現実的な時間認識に基づいている。この点で、この未完了形の用法もまた非現実性に関わるものとして解釈できると論じた。

1. 本発表の概略

本発表はアラビア語チュニス方言の未完了形の特殊な用法が非現実的な時間認識を表していることを主張する。次の第2節でこの言語の概略と資料について述べる。第3節では先行研究を踏まえて、未完了形と非現実性の関連をまとめる。第4節では、未完了形が後景の語りに用いられることを述べ、第5節では、その反証となるような未完了形の例を取り上げる。第6節では、この反証となる例もまた非現実的な認識を表していることを指摘し、非現実性と結びつける。

2. アラビア語チュニス方言の概要と本発表の資料

アラビア語チュニス方言（以下チュニス方言）は、現代アラビア語諸方言のひとつであり、チュニジア共和国の首都チュニスを中心にコイナーとして広く用いられている言語である（Gibson 2009）。32種の子音（b, b', m, m', f, θ, ð, ð', t, t', d, n, s, s', z, z', r, r', l, l', f, f', ʒ, k, g, x, ɣ, q, h, ʕ, h, w, j/、IPAに準ずる）と、長短合わせて6種の母音（/i, a, u, i:, a:, u:/）を持つ。名詞のクラスは男性・女性に分かれ、単数と複数の区別がある。動詞には完了形、未完了形、命令形の3つの活用系列があり、人称・数・性によって活用する。本発表で用いる略号をまとめる。1/2/3：1人称、2人称、3人称、AP：能動分詞、ASP：進行・継続アスペクト標識、DEF：定冠詞、F：女性、FUT：未来標識、IMPF：未完了形、M：男性、NEG：否定、PERF：完了形、PL：複数、-：形態素境界。

本発表の資料としては、『アルアルウィー物語集』（Al-ʕArwi, ʕAbd-al-ʕazi:z (1989) *hika:ja:t al-ʕArwi: Vol. I-IV. 2nd edition. Tunis: Al-Da:r Al-Tunisi:ja li-l-Naʕr*）を利用した。本書は、Al-ʕArwi, ʕAbd-al-ʕazi:zがラジオでチュニス方言で語った物語をまとめたものである。なお、同書からの引用にさいしては、訳文末の[]内に、巻数をローマ数字で、ページ数をアラビア数字でその箇所を記した。

3. チュニス方言の未完了形と非現実性

類型論的研究（Fleischman 1995）において未完了形は、非現実モダリティに関連付けられ、また

アラビア語エジプト方言においても未完了形はアクチュアリティの低さを示すものとされる（榮谷 2002）。これらの先行研究を踏まえて、熊切（forthcoming）では、チュニス方言の未完了形の用法を非現実性という観点から以下のように分類する。

(1) チュニス方言の未完了形の用法

I. 非現実性用法（未完了形が単独で述語動詞として現れる場合）

- (i) 非実現性（未来の事態や非実現の事態をあらわす）
- (ii) 時間的不定性（時間的に不定な事態、属性、例示による形容、習慣、事態認識）
- (iii) 語りにおける特殊な用法

II. 現実性用法（未完了形に進行・継続アスペクト標識（ASP）が伴う場合）

III. 従属的用法（述語動詞や能動分詞に後続する未完了形）

（熊切: forthcoming）

未来とはいつ生じるかわからない非実現の事態、習慣的な事態はその事態の生起の時間そのものは指定されておらず、また、どの時間においても成立する事態が属性である。すなわち、チュニス方言の未完了形の表す事態はいずれも時間に限定されていないという点で共通している。現実の客観的な時間軸に事実として配置しうることを「現実性」と呼ぶならば、この時間的な非限定性は「非現実性」ととらえることができ、チュニス方言の未完了形はこの「非現実性」を示す形式とみなすことができる（ただし、進行・継続アスペクト標識をとともなう「II. 現実性用法」は除外される）。

「I. 非現実性用法」の「(i) 非実現性」と「(ii) 時間的不定性」の例を次に挙げる（関係する未完了形とその訳を太字にした）。

(1)(i) 非実現性（未来） **jaltʕx-ik** 「彼はあなたを**倒す**（でしょう）」 [III-76]

倒すIMPF.3SG.M-あなたを

(2)(ii) 時間的不定性（習慣） w-kull li:la **jba:t** ʕand-wahda

そして-すべて 夜 夜を過ごすIMPF.3SG.M ~のところで一人の女

「そして、毎晩、彼は（娘のうちの）ひとりのところで**夜を過ごす**」 [I-30]

本発表で取り上げるのは、熊切（forthcoming）で別に議論するとした「(iii) 語りにおける特殊な用法」であり、本来ならば完了形が現れるような状況で未完了形が現れる用法である。

4. 語りと未完了形

次に、語りにおける機能という観点から未完了形を捉える。

Hopper (1979) は、語りを、語りの骨格をなすような本筋の出来事を語る前景の語り（foreground discourse）と、本筋ではない「脇の」出来事を語る後景の語り（background discourse）とに分け、アスペクトや語順が前景・後景の語り分けに関与していると考えられる。

この2つの語りにおける文法的な特徴の違いは、チュニス方言の物語テキストにおいては、動詞形の違いにも現れている。すなわち、前景の語りを担うのは主として完了形であり、未完了形は後景の語りを主として担うのは未完了形であるのが観察できる。

(3) 完了形 (太字) による前景の語り

hazzit hazmit-il-ʕsʕi: w-ʔalʕat-lu: **sakkrit** ʕli-ha:
取るPERF.3SG.F 束-DEF-棒 そして-登るPERF.3SG.F-彼に 閉めるPERF.3SG.F ~に対して-彼女

ba:b il-bi:t w-qaʕdit bahða:h w-hallit il-hazma
ドア DEF-部屋 そして-座るPERF.3SG.F 側に-彼の そして-開けるPERF.3SG.F DEF-束

「彼女は棒の束を取った。そして彼のところに上がった。彼女 (彼の妻) に対し (見えないように) ドアを閉じた。そして、彼のそばに座った。そして、束を解いた」 [I-53]

(4) 未完了形 (太字) による後景の語り

harka kbi:ra fi-da:r sʕ-sʕultʕa:n n-na:s jhaðʕʕru: fi-l-ʕars
動き 大きい ~の中家 DEF-スルターン DEF-人々 準備するIMPF.3PL ASP-DEF-結婚

jnaðʕʕfu: w-jidhnu: w-jzajjnu:.....
掃除するIMPF.3PL そして-壁を塗るIMPF.3PL そして-飾るIMPF.3PL

「スルタンの家ではてんやわんやです。人々は婚礼の準備をしている最中で、掃除をし、壁を塗り、飾りつけ... (以下略)」 [I-49]

(3) では、娘が棒の束を持って、上階の男の部屋に行き、男のそばで束を解く、という本筋の出来事が、完了形をひとつひとつ並べることで順序立てられて語られる。(4) もやはり、動詞が連続しているが、ここでは未完了形3つである。これらの未完了形が述べているのは、ひとつひとつ順番に事態が生じたということではなく、総体として結婚式の準備の内容について描写しており、その意味では個々の未完了形は時間的に不定である。そして、こうした状況を背景に登場人物の行動が述べられるのであり、これらの未完了形は後景の語りを構成している。

また、物語の導入における次のような例では、未完了形の連続は事態が順番に生起していることを表しているが、総体として習慣的状况を表している。引用箇所では、こうした習慣的状况を後景として、物語の本筋となる前景の語りが始まる。

(5) **tixdim** hi:ja w-i:ja:-hum fi-sʕ-sʕu:f **jqardju:** w-jayzlu:
働くIMPF.3SG.F 彼女 そして-ともに-彼ら ~の中で-DEF-羊毛 梳くIMPF.3PL そして-紡ぐIMPF.3SG.F

w-txarriz ʔ-ʔuʕma w-l-qja:m **timji:** tbi:ʕ-hum
そして-生産するIMPF.3SG.F DEF-横糸 そして-DEF-縦糸 行くIMPF.3SG.F 売るIMPF.3SG.F-それらを

fi-s-su:q.....
~で-市場

「彼女 (母親) は彼女たち (娘たち) とともに羊毛の仕事をします。(彼女たちは) 毛を梳きま
す。糸を紡ぎます。横糸と縦糸を作り出します。(母親は) 市場に売りに出ていきます... (そし
てお金を稼ぐ、というそんな貧しい暮らしぶりでした。そこに男が現れたのです。)」 [I-9-10]

以上、前節と本節で、未完了形が非現実性に関連づけられ、さらに後景の語りを担うこと、いっ
ぱう、完了形は事実的な現実性に関連づけられ、前景の語りを担うことを確認した。

しかしながら、物語テキストにおいては、未完了形が現実性を表す完了形と肩を並べて現れ、前
景の語りを構成する特異な例が見られる。これが、「(iii) 語りにおける特殊な用法」ある。ここ
では、この用法を「前景の語りにおける特殊な用法」と呼び、これまでの議論の反証となるよ
うなこの用法について検討する。

5. 前景の語りにおける特殊な用法

上述のように、この用法は、完了形が現れるような環境で未完了形が現れるものである。この場合、未完了形は、1つだけのこともあれば、連続することもある。そして、本発表で取り上げる例はいずれも「異常な事態がありえないほどの短い時間に生じた」ことを述べるものであり、これが、この「前景の語りにおける特殊な用法」の意味であると考えられる。こうした特殊な意味を表す用法のため、その頻度は少ない。

以下の例では、この特殊な用法に関わる未完了形を太字で示した。それ以外の未完了形については、(1)の用法の分類で該当するものを付記した。訳においては、この未完了形を太字のル形に対応させ、日本語としてよりふさわしいと思われる訳はカッコ内に入れた。

まずこの未完了形が単独で現れた例から挙げる。次の(6)と(7)の未完了形は、「彼女」の窮地を救うことになる魔法のドレスと、鶏の腹から飛び出てきた魔法の指輪という、異常な物体の異常な出現が瞬間的に生じたことを述べるものである。これをこの未完了形に先行する完了形との関係で捉えると、この未完了形の述べる事態が、完了形の述べる事態とほぼ同時に生じたと受け取ることもできる。

- (6) *kassrit* *iz-zu:za* *θ-θa:nja* ***juxruʒ*** *qufta:n* *iðhib* *ð'arb-imt'arqa*
 割るPERF.3SG.F DEF-くるみ DEF-2番目 出るIMPF.3SG.M ドレス 金 金糸の刺繍
jaxt'af *l-anð'a:r* *minhi:nu:* *ha:k-il-qufta:n* *qa:m* *jaft'ah*
 奪うIMPF.3SG.M DEF-視線 すぐに その-DEF-ドレス 始めるPERF.3SG.M 踊るIMPF.3SG.M

「彼女は二番目のクルミを割りました。目を奪う (I (ii)) ような金糸の刺繍のドレスが**出てき**ます (割るやいなや出てきました)。すぐにそのドレスは踊り (III.) 出しました」 [I-52-53]

- (7) *haft'fit* *it'f'baq* *ʕa-l-ma:jda* *hi:ja* *za:t* *tqus'sʕ*
 置くPERF.3SG.F DEF-お盆 ~の上-DEF-テーブル 彼女 来るPERF.3SG.F 切るIMPF.3SG.F
fi:-h ***w-jitnat'fir*** *minn-u:* *ha-l-xa:ʕim*
 ASP-それ そして-飛び出すIMPF.3SG.F ~から-それ あの-DEF-指輪

「彼女はテーブルの上に (鶏の) お盆を置いた。彼女は来てそれ (鶏) を切っている (II.)。そして、そこから指輪が**飛び出てくる** (切るやいなや出てきた)。」 [II-247]

次の(8)は、異世界で金持ちとなり、妻を得た男が、「現在を生きる」という異世界のルールを破ったことにより、怒った妻に殴られて、現実世界に戻されるという場面である。ここでは、「妻がスイカで殴る」という、物語において決定的な帰結をもたらす行為が、妻の発言とほぼ同時に起きたことが、未完了形で述べられている。なお、後続する動詞《飛ばせる》は完了形となっている。

- (8) *ʕa:rif* *nafs-ik* *ma:f-tʕi:f* *l-yudwa?* ***w-tað'rb-u:***
 知るAP.SG.M 自分-あなた FUT-生きるIMPF.2SG ~に-明日 そして-殴るIMPF.3SG.F-彼を
b-ha:k-il-baʕʕi:ha *t'ajjritt-u:* *fi-s-sma:* *hbit'*
 で-あの-DEF-スイカ 飛ばすPERF.3SG.F-彼を の中-DEF-空 落ちるPERF.3SG.M

「『ご自分が明日のために生きようとしているのをご存知かしら?』 そして彼女はスイカで彼を**なぐる** (言うのと同時になぐった)。彼女は彼を空に飛ばした。彼は落ちた」 [I-104-105]

以下に見るのは、この用法の未完了形が連続して現れる例である。(9)は Singer (1984: 303) からの

例である。Singer はこれを「完了形に後続する未完了形」に含めている。これは上の分類の「III. 従属的用法」に該当する。しかし、前後の文脈は分からないものの、謎の鳥が出現して（おそらくは物語上重要な）ネックレスを瞬く間に奪って去っていく様子を描く、これらの3つの未完了形は、「前景の語りにおける特殊な用法」に含めるべきであろう。ここでは、未完了形の使用により、これらの3つの動作（鳥の出現、奪取、逃亡）が同時とっていいほどの短い間に起きたことが述べられているからである。なお、ドイツ語の訳では、これらの3つの未完了形が過去形となっているにも留意されたい。

(9) xraʒ il-barʳa jfu:f fi-ha: w-jitʳadda: ʕasʳfu:ʳf
 出るPERF.3SG.M ~に-外 見るIMPF.3SG.M ASP-それ そして-やってくるIMPF.3SG.M 鳥

juxʳfaf a:k-ɪf-ʒarka w-juhrʳub
 奪うIMPF.3SG.M その-DEF-ネックレス そして-逃げるIMPF.3SG.M

「彼は外に出た。彼はそれを見ている (II)。鳥がやってくる。そのネックレスを奪う。そして、逃げる (鳥がやってきてネックレスを奪うや飛び去った)」

“er ging hinaus, um es sich anzusehen, da flog ein Vogel vorbei, entriß ihm das Halsband und floh [= flog davon]”
 (Singer 1984: 303、表記を変更し、グロスと日本語訳を付した)

(10) は、御前試合で、田舎の少年が、宮廷付きの強靱なレスラーを一瞬で打ち負かすという異常な事態を述べるものである。3つの未完了形は、少年がレスラーを倒す過程（羽交い締めにし、逆さに持ち上げ、脳天落としをかける）がやはり同時とっていいほどの短い瞬間に生じたことを語っている。

(10) hma:rit ʕi:ni-h raffat ʒla:gm-u: tqaddim-lu: da:ʳu:
 赤くなるPERF.3SG.F 目-彼の 震えるPERF.3SG.F 口髭-彼の 進むPERF.3SG.M-彼に 回るPERF.3PL

b-baʳðʳ-hum du:ʳti:n ʳma: jidd-u: ʕli-h ʒa:t fi-l-fðʳa:
 ~で-互いに-彼ら 2回転 投げるPERF.3SG.M 手-彼の の上-に-彼 来るPERF.3SG.F の中-DEF-空

flit minn-u: l-marʳa l-u:la: iθ-θa:nja iθ-θa:lθa w-minha:
 かわすPERF.3SG.M から-彼 DEF-回数 DEF-1 回目 DEF-2 回目 DEF-3 回目 そして-それから

tʒarbi:ka mi-tʒarbi:ka:t il-wlid jurʳbuʳf ʕli-h ʳabʳa barʳa:ni:ʒa
 掴み合い から-掴み合いPL DEF-少年 縛るIMPF.3SG.M の上-彼 縛り 外の

w-ʒi:b-lu: sa:qi-h fi-l-fðʳa: w-ʒayrs-u:
 そして-持つていくIMPF.3SG.M-彼に 足PL-彼の の中-DEF-空 そして-植えるIMPF.3SG.M-彼を

yarsa:n bsʳal qa.mit ðʳ-ðʳaʒʒa w-ħa:mu:da: ba:ʒa: wqaf
 植えること 玉ねぎ 起きるPERF.3SG.F DEF-騒ぎ声 そして- (人名) (称号) 立つPERF.3SG.M

min-ʕla:-kursi:h
 から-~の上-椅子-彼の

「彼 (レスラー) の目が赤くなった。彼の髭が震えた。彼は彼 (少年) の方に向かった。(彼らは) 向きあってぐるぐる2回転した。(レスラーは) 彼 (少年) に腕を投げかけた。(腕は) 空を切った。(少年は) 彼から身をかわした。1回。2回。3回。そしてそれから、何回かの掴み合いの後、少年は「外固め」に(背後から両腕と胴体を) 締め付ける。そして、足が宙に浮くように相手を逆さに持ち上げる。そして、玉ねぎを植えるように彼を頭から落とす。騒ぎ声が上がった。そして、ハムーダ・バシヤは椅子の上から立った。(少年は外固めを繰り出すや、相手

を逆さに持ち上げ、脳天杭打ちで頭を叩き割った) 」 [III-78]

ここで興味深いのは、完了形の語りが、この異常な事態を述べる部分のみ未完了形に転換し、これが終わると、語りは再び完了形に戻る点である。あたかも試合の映像において、決定的瞬間がスローモーションとなり、それが終わると再び通常の時間に戻る、というのに似た劇的効果を、これらの3つの未完了形が与えていると考えられる。

同じような「スローモーション効果」がもっと異様な印象を伴って実現しているのが (11) の例である。不思議な木片の力により異世界に迷い込んだ男が、その木片を大蛇に奪い取られるという、この場面においては、大蛇の出現と木片の奪取とが一瞬のうちに起きたことが、3つの未完了形によって語られる。言い換えれば、これらの未完了形は通常とは異なる時間の流れ、スローモーション的な時間の流れを生み出すのであり、そして、この異常な時間の流れは、続く完了形 *qa:l-lu:* によって、通常の時間に引き戻されるのである。

(11) *hu:wa ma:za:lki:f kammal kilmt-u: w-il-mahbis jitqlab*
 彼 まだ~ないうちに 終えるPERF3SG.M 言葉-彼の そして-DEF-瓶 ひっくりかえるIMPF3SG.M
w-juxruz min-taht-u: θ-θaʃba:n jittirma:-lu: ʃla:-kaʃt-u:
 そして-出るIMPF3SG.M から-下-それ DEF-大蛇 飛びかかるIMPF3SG.M-彼に の上-ターバン-彼の
jaxʔaf-lu: ha:k-l-ʃu:d illi: za:bu: l-hma:m
 奪うIMPF3SG.M-彼に あの-DEF-木片 関係詞 持ってくるPERF3PL DEF-鳩PL
w-qa:l-lu:
 そして-言うPERF3SG.M-彼に

「彼がまだ言葉を言い終わらないうちに、瓶がひっくり返る (I. (ii))。そして、その下から大蛇が出てくる。彼のターバンに飛びかかる。鳩が持ってきたあの木片を彼から奪う (そして、その下から大蛇が出てくるや、彼のターバンに飛びかかり、木片を奪った)。そして (大蛇は) 彼に言った」 [IV-72]

6. まとめ：未完了形の表す非現実的な時間認識

前節の諸例で見たように、「前景の語りにおける特殊な用法」の未完了形は、「異常な事態がありえないほどの短い時間に生じた」ことを述べるとまとめられる。これを時間の観点から捉えると、未完了形がひとつの場合 ((6) (7) (8)) は、先行する完了形との同時性が表わされ、未完了形が連続する場合 ((9) (10) (11)) は、それらの未完了形の表す事態がほぼ同時とっていいくらい短い間に生じたことが語られる。

次に、「前景の語りにおける特殊な用法」と後景の語りの未完了形との関連を検討し、相違点を確認する。

まず (4) の「未完了形による後景の語り」の未完了形の連続を見ると、これらは個別的にではなく、総体としてある状況を描写しており、その意味では「前景の語りにおける特殊な用法」の同時性を読み取ることができる ((11) の *jitqlab* 「ひっくり返る」もまた前の完了形と組みになっての同時性を表わしている。この構文については熊切 (2019) を参照されたい)。

とはいえ、「前景の語りにおける特殊な用法」では、未完了形が連続する場合、あくまでも未完了形の表す事態が同時とっていいほど短い間に順番に生じたということを表し、これ

は(4)の総体としての同時性とは異なる。だが、総体として習慣的状況を語る(5)のように、未完了形の連続が、事態が順番に生起していることを表しうることを考慮に入れれば、「前景の語りにおける特殊な用法」の未完了形が連続する例も、やはり後景の語りの未完了形と関連させて捉えることができる。

しかしながら、「前景の語りにおける特殊な用法」の未完了形は、後景の語りの未完了形とは大きく異なる点もある。それは、事態の異常性を表示するという、後景の語りの未完了形はもちろん、前景の語りの完了形にもない機能を持つ点である。

ここで、前景の語りがどのように完了形により構成されるかを考察すると、それはちょうど(3)で示したように、事態を客観的な時間軸にひとつひとつ配置し、物語を展開していくような仕方である。いっぽう、(9)(10)(11)の「前景の語りにおける特殊な用法」の未完了形の事態の語り方は、同時とっていいほどの短い時間内に事態を配置するものである。語り手は、時間を引き伸ばし、そこに事態を配置することにより、あたかもスローモーションのような効果を生み出すのであり、その意味では、語り手の主観に委ねられた用法である。すなわち、「前景の語りにおける特殊な用法」の未完了形は、完了形の客観的な時間軸から逸脱した主観的な時間認識に基づくものと考えられる。そして、この用法が持つ特異な表現性も、客観的な時間軸からの逸脱によるものと想定できる。

物語における客観的な時間軸とは、もちろん、物語は虚構であるからそこに流れる時間もまた虚構のものであるが、話し手、そして聞き手が現実のものとして受け入れている時間認識に根ざしている。その意味では、これを「現実的な時間認識」と捉えることができよう。これにに応じて、話し手の主観的な時間認識もまた「非現実的な時間認識」と言い換えることができる。この非現実的な時間認識に基づく「前景の語りにおける特殊な用法」もまた、非現実性に関連づけられることとなり、(1)の分類のように「I. 非現実性用法」のひとつに含めることの妥当性を高めるといえよう。

参考文献

- Bybee, Joan L. and Suzanne Fleischman. (eds.) (1995) *Modality in Grammar and Discourse*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Fleischman, Suzanne. (1995) Imperfective and Irrealis. In: Bybee, Joan L. and Suzanne Fleischman. (eds.) *Modality in Grammar and Discourse*. 519-551.
- Gibson, Maik (2009) Tunis Arabic. In: Versteegh, Kees, Mushira Eid, Alaa Elgibali, Manfred Woidich, and Andrzej Zaborski. (eds.) *Encyclopedia of Arabic language and linguistics*. Vol. IV, 563-571.
- Hopper, Paul J. (1979) Aspect and foregrounding in discourse. In: Talmy Givón (ed.) *Syntax and semantics*, XII, 213-241. New York: Academic Press. (https://www.researchgate.net/publication/242503579_Aspect_and_foregrounding_in_discourse)
- 熊切拓 (2019) 「アラビア語チュニス方言において主題をもつ文の並列が意味するもの」『東京大学言語学論集』41, 155-179.
- 熊切拓 (forthcoming) 「アラビア語チュニス方言における未完了形と非現実性」『日本エドワード・サピア協会研究年報』35.
- 榮谷温子 (2002) 「アラビア語エジプト方言の未完了形の用法」『アジア・アフリカ言語文化研究』63, 265-301.
- Singer, H-R. (1984) *Grammatik der Arabischen Mundart der Medina von Tunis*. Berlin/New York: Walter de Gruyter.
- Versteegh, Kees, Mushira Eid, Alaa Elgibali, Manfred Woidich, and Andrzej Zaborski. (eds.) (2009) *Encyclopedia of Arabic language and linguistics*. Vol. IV. Leiden/Boston: Brill.